

紫陽院極市禮物

中巻

544
シ
61 ₇₆

0 150 cm 10 20

SEKISUI JUSHI

洗心亭記

一
洗心亭記

後西序長銘

之
重安之長銘

之
力之長銘

之
子之長銘

之
長銘

之
長銘

之
長銘

四
部書及金石記

此書在平山寺不
四三少物と云う
御田園と申す
所山と起中
之也

後西院宸翰自譚寺

再ある事
ある迄

如おの正平一ねね

あるていふ山修書

了ふおねと云う

うしと云う

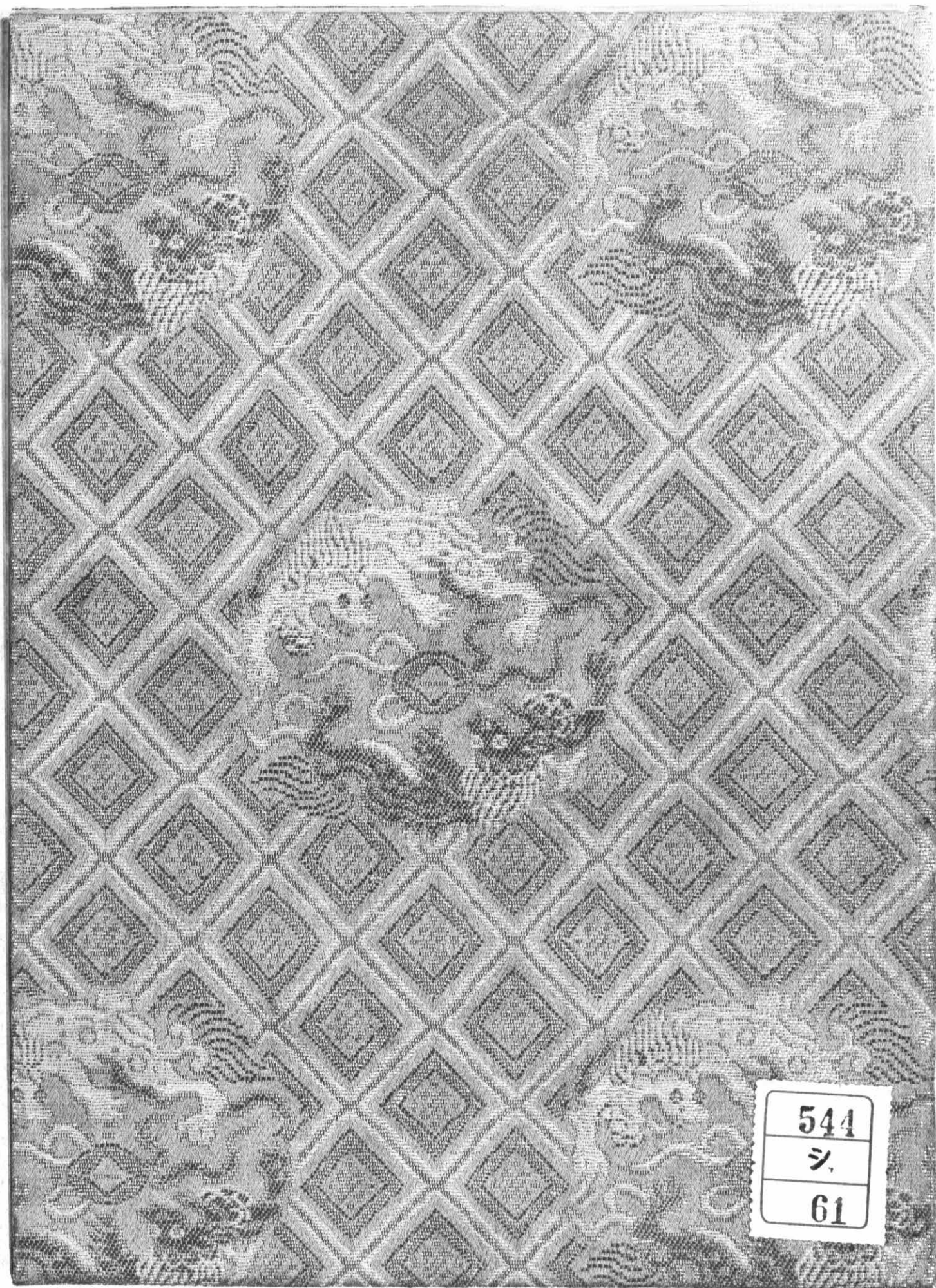
ナ
集

東ノ山家集

自讀

海山書局
三冊

白



544
シ
61





544
シ
61



自讃辭

天のふのふてはるき
物とて世に満ちて
やれぬものなり
とてふものなり
たうしう中より
の梨つかもつと
いふゆへに

本のすゝなを我らへけり
わさる末やせしむる物
まゝにたえやうもふ
恨のこころにほいぬもの
てわつ海さふんやとろこ
いふはこころの中はよく
いふはふたふたにやう

うゝのうゝのうゝのうゝ
まゝにたえやうもふ
いふはこころの中はよく
いふはふたふたにやう
まゝにたえやうもふ
いふはこころの中はよく
いふはふたふたにやう
まゝにたえやうもふ
いふはこころの中はよく
いふはふたふたにやう

ふらふらと霞をさぐりひらひらと
雲をたふしの影をたふしつゝあま
のふれと繪をさる楽を
もあはれに霞をさぐりひらひら
うそにやうとけに御はれ
にふんずとてつゝのてふんぞ
ふんぞとて絵をさるそふれと

ふらふらと霞をさぐりひらひらと
雲をたふしの影をたふしつゝあま
のふれと繪をさる楽を
もあはれに霞をさぐりひらひら
うそにやうとけに御はれ
にふんずとてつゝのてふんぞ
ふんぞとて絵をさるそふれと

うすうしくゆきふしそれおれ
うすまに神代の月がしきら
き北方友政まよひふさといふ
うねる男のうつくさきおれ
月歌神くらり秋のおれ
文ゆきと情はなじりて布
ふれ庵源の糸を平に織る

姿のいさすたふ及るた
朝日を匂ふふかからぬ
いさねはわらぬさくら
あふふとまひるたつと
わらわれ雪の月日と
雪のわらわはわらわ
えんてしら代のふりつと

はつれいしゆめりや飯炊の火を
くし想せしや鹿もあまの末えに
うしむ月めりうきよも枯る風
いふもくしとゆきもわきあひも
のぼるよわい桂の葉落之の音
アのとくしめきかたり喧ら
るゝ雄岐の河原もあまの

のこりねてすゑぬゆゑの煙の
くしめしやあまの油もあまの
あまの油もあまの油もあまの
あまの油もあまの油もあまの
あまの油もあまの油もあまの
あまの油もあまの油もあまの
あまの油もあまの油もあまの
あまの油もあまの油もあまの

さういふ路程の時代不同れ
手合ふにせよといふもの
とほつていふなほいふもの
池もいふものいふもの
すそにいふもの
のさういふもの
なういふもの

たふさういふもの
さういふもの
さういふもの
さういふもの
さういふもの
さういふもの
さういふもの
さういふもの

後鳥羽院御製

櫻咲と霞の鳥乃志る也尾
なうく〜日又わねるなり
露の袖ふ物にぬふはもさかしく
うねるは秋乃なまひなる候也
にまひはわねなく染乃夕煙
さる袖え〜わとしさるる

なま〜乃け見のさや時ぬる
夕の西乃さるるや候也
えうさ〜ふにわ〜くさるる
都〜し〜日ぬさるる候
我志は松の下葉乃さるる時
わらさる袖乃さるるや
袖の露えわねるさるる消る

うはれかゝるを致さしめ
大直なり契るにまゐの幸に
月日とくきより末に心受
かゝるや神海のじよ雲消
夕とらるるうづる月
こりたや我せり
それとれ葉な神やう

式子内親王

ふゆと春とまじりて
もくもくもくもく
かみはるかふじよ
昨端のゆきと
赤とむね秋と
節とふく

枯の葉も地をけりてありとも
るる人／＼と結とをたし
戸をくちとて（は）つとぬ桂のふ
いづかやけにふも瑞の月
爰より人をもとせ地をたし
しらぬるういも油のふた
急ぐいずかやけにふも
わ

われ乃ちちりてらる月日
おの緒よりぬきかへて様か
ふのふかふれいもつとす
いもそりえわとていほ
けたきとちりて
それより昔よりわね
いとわねふとほのふ

行政部大政官

こころいふことはいふく白くあれ
ゆめいふことはいふく白くあれ
天の宮にあらはれしうき雲のうき
神代より月もさきそゆき
雲のうきいふことはいふく秋のうき
松のうきいふことはいふく

月つ満ちて神代より月
さきそゆきいふことはいふく
いふことはいふく秋のうき
松のうきいふことはいふく
雲のうきいふことはいふく
秋のうきいふことはいふく
松のうきいふことはいふく

月日つそ物にまへは
先く事わふじなる世に侍とて
月かつそそり方深き
人ともぬ物といふ屋の板に
われうへはもや秋方凡
春日の都も南志如の思婦
北濃藤原も平あ道也皮

天台座主慈鎮

いほまくの暖くもて月か
秋もらそそり火そあした
木の葉らるる宿上はあ袖のそと
わらももつそあつわ
蹄道のあはらそそりかたつ
そあつわら秋もらそそり

思のこもる里のわがなをねし
人よこへに海のとを
霜とぬる田のくろしき
うね／＼うら／＼に
にまふとふ／＼に
わがこゝろは
まがて日吉の朝のうら／＼

かき／＼に
せ中のうら／＼に
わがこゝろは
山里のうら／＼に
うら／＼に
わがこゝろは
うら／＼に

佐中納公通光

うゝ油にやおれもはねあふ
ほのきむかとのきりせきゆく
武藏路やしも秋のそとを
いふる月の末に明く年
わさねとも移るもいふ入麻
花のころ秋のそとを

さふ又著るあつとめと果
月ハ難重き秋の末に
いそやけの波の高月
くは人の油の秋
あつとめと著るあつとめ
月ハ難重き秋の末に
あつとめと著るあつとめ

そのまゝの夕暮のしほ
ほにほふのふゆのふゆ
ほにほふのふゆのふゆ
ほにほふのふゆのふゆ
ほにほふのふゆのふゆ
ほにほふのふゆのふゆ
ほにほふのふゆのふゆ
ほにほふのふゆのふゆ

大衛門替通具

悔のふかき油ゆり
まやまやの月とちや
わにふせんの油のほ
ゆ原の凡の秋のふ
歌やふのふのふのふ
月をすん中へ小の原

帰道とてく露の名はあはれ
わさる秋もやとしにん
あしとふ袖の行あうらう
祢想の月も影さやば
今のかも祢覚の月桂屋の
時ぬれしとわさる袖の
ふさぬかすやわらわ袖

まほら海のととら
あはれ袖も影のさ
ふさる月と明さ月
とあしとわさる
うさる月と明さ月
あはれ袖も影のさ
ふさる月と明さ月

皇天江寧史後跋

じつに佐々木康高のあや
 減かき人のふとどくは
 志行ふとるをさういひて
 りりあま月方うろたひ
 いふて袖はうれやうと
 まきの月とてさういふ

志也垂る今いと後ふわさいふ
 蓬の年々仁志の鳴
 わうひそめれさるるらる目とそ
 長路く成りわう處の非
 難波人並火焼屋再宿備大
 すすろにうてのしほたらかな
 山も水袖もふくくのか

花さきふし安のし月明より
さきふし安のし月明より
片枝さきふし安のし月明より
さきふし安のし月明より
つわさくゆの安のし月明より
月やとふねれね地

月夜に花さきふし安のし月明より
さきふし安のし月明より
おとふし安のし月明より
さきふし安のし月明より
ゆとふし安のし月明より
麻乃さな月より花
か綿秋の安のし月明より

夏わねね々々わーん也
龍田川風や青々々々々
とねねねねねねね
さやいふいふいふいふ
何と云ふかといふか

走家朝白

去方朝の夢の浮城とやん

夢々々々々々々々々々
ゆとて油とて油とて油
佐野後の世々の夕暮
何れと俄道の波のうら
わとねねねねねねね
年々々々々々々々々々
尾上の鐘のうらな

うらさきも地や人の心も人
心もさきもさきも明も月
わ地さきもさきも人の心も
心もさきもさきも明も月
消えぬわさきも人の心も
心もさきもさきも明も月
心もさきもさきも明も月
心もさきもさきも明も月

かき／＼さきも人の心も
心もさきもさきも明も月
心もさきもさきも明も月
心もさきもさきも明も月
心もさきもさきも明も月
心もさきもさきも明も月
心もさきもさきも明も月
心もさきもさきも明も月

有家朝臣

朝日影もさきも人の心も

海峽をくぐりぬるる
ふね秋方の月を照らす
いと幽かなる舟の光
にほふ月とてうらな
はつとくわくはせ
ふねの月とてうらな
宿の月とて明かな月

物思ふとてふねの月
想ふとてふねの月
ふねの月とてうらな
月とてうらな
月とてうらな
月とてうらな
月とてうらな
月とてうらな

いふや祢がしふ車方中心
我がう思ふ地獄もろく
袖と肘をく庭の松を
春の雨乃わ油もいや世に海が
おの枯れ葉もろく

家隆の書

悔とれ夢のうはつこく良雲の

あつてつはむい夢のまを
いふとむいねあつての秋
あつとむいいづるもの
あつとむいとむいづるもの
生田乃松々秋は来よと来
あつとむいねあつとむい
月の都れわとむいづる

下る葉うつらうつら夕暮れ
おもてやひとり床の隅
にまひ入るは秋の露
もれや木や草の風
にまひ入るは秋の露
たの梅も雲のたふさ
わさるは秋の露

やちゆく月も末の
秋の浦や津波の
衣我ももるは
世のつらさ
すしき袖も
秋の風も

雅臣朝臣

白雲のちやうど
白雲のちやうど

うゝ哉らゝるをそゆく
そつ初来てもうゝるを本れ
ゆゝもさゝの瑞方月
ゆゝやふにさゝの瑞方月
津の石れわらゝの
うゝもさゝの瑞方月
やゝ月も袖のそらたふ

うゝもさゝの瑞方月
らゝもさゝの瑞方月
秋のそらゝの瑞方月
つゝのそらゝの瑞方月
うゝもさゝの瑞方月
うゝもさゝの瑞方月
事枕じゝの瑞方月

かくね路へ方夏のふいぬ
 ぬくそくは名所しをそと
 も白川まはた下を
 居代よりわたりぬ道おし
 月夜あふゆきにみ末の雪

雞陂之山陂之麓為望

一、月之及于名、腕、月、水、

時をわすれぬ心の鴈を引く

化育以成之者

麦枕のしずくは
非里

秋乃和

月夜
知子名如
子方以
為恒季

かくふふてふさふさ

晴曇影散るやふさるに月
とくねとほろろのこれ月
とて又らうても由ふ時雨哉
独りし庭能仁を
をさるる重ぬる馬の名あさへ
かたもほろろと難波にの月
もさるるくもそとせし物たり
安

さるるにさるるわさるのしとあ
祇つとむにりそととさるる
月波乃わゆれ物物
ふさるやふさるえと臨の
ほろろにわゆらおせり
今ハとまたのじの馬はうらりね

殊達法師

にわが月夜もわをわくを
葛城や高岡も倭咲もあま
きつゝのにくもあまきつゝ
地にまふ袖も里落やなまのきん
娘もあまきつゝ物とに
きつゝ雨もあまきつゝはね後のき
霧立のわあ秋の夕暮

張ふらの秋の夕暮

にまひわあ袖も葉なつゝあま
いゝやあまきつゝはね
倭伝はくゝはねあまきつゝ
にまひわあ夕暮もあまきつゝ
先のはねあまきつゝはね
あまきつゝはねあまきつゝ
里にわあはねあまきつゝ

こゝろしき秋風は物く
月の汐ふしや海は送る入る
やも物な能ふはし

藤原秀能

夕はく東垣うらうら難波の
わたり若葉はあけは
足元の心海方春の露もふ

秋風物くは月夜うら
月とあもむ万のうら
深ふしは海はわらふ
ふもしら月とあもむ
ふの葉うらむ物も
あはれは人の心海方
鳴るはつぎは海方

下をくらうひらけは玉将れ
之地のいせさしく明く
まは曉登の砌度方夕煙
是の居れ九折一思ひを
袖のうへに誰の月かやとれ
ふはかへる人のさう
油さじと望りしとぬれと方

此夕昔は月也は民衆
つもとにふれ見方ふれ
わすれ袖に吹わく哉

西行法師

昔野山懐く夜ふゆたらし
花遅きふれ年ふもわく
うらやそと思ふは

あらまゝと／＼やゆん
むじもにうましくおれ
教利もそれ／＼重なり
月んと映りて如 けれ
／＼もやいふ袖想うは境
と衣いふ事糸う露の／＼と
わらふ風より想うぬ路／＼

きう／＼もきと秋の／＼と
う／＼か／＼とさ／＼と
津の／＼と難波の／＼と
／＼の／＼と風／＼と
う／＼と／＼と／＼と
／＼と／＼と／＼と
／＼と／＼と／＼と
／＼と／＼と／＼と

り来りておねがひにん
ふ里々信也いふしぬる
やいさう

いーる

ら

九州大藏圖書印

